

遠く慮りて近く行へ

湘 南 生

燒野の雉子夜の鶴で誰れか子を思はぬものがあらうか子を以て知れ親の恩とは能く云つたもので、全く親の子を思つて呉れる其至情は外に比べるものがない位である、併し其思つて呉れる親が健全な常識を持つて居るものなら至極結構であるが、之に反して少し沒常識で見當違ひの考などを持つて居て、然も少し頑固な人などであつたら最期、其子はみじめなもので、逆も健全な思想や常識のある行動を有する人間とはなれる譯のものではない、尤も斯んな烈しいのは例外であるが是程でなくとも唯々子供可愛の一點張りて子女教養上に於ける現在及將來の目的を明に意識しないのや又中には自身立派な考を有する積りで居て實は少し間違つた考を持つて居るのが尠くないものである。

中には無暗矢鱈に子女を飾り立て、立派であるとか、よい子であるとか、上品であるとか云はれる

のを此上なきことにして居るが然もなくば少くも自ら斯る有様を眼前に見て獨り我虚榮心を満足させて御座るものもあるし、中には我子程利好なものはないと云ふ自慢心や世間の子供にまけさせまいと云ふ欲望から無暗に子供に種々な事を教へ込んで悦んで居るものもあるし、又中には無暗に子供を壓迫して靜に大人なしくさする事ばかり考へて居る人もある。

是等は何れも其思想の根本に於て誤れるが然もなれば將來の目的を現在に實行したりする弊害である。

又斯ふ云ふ風に考へることか出来る。今日の人は理想は如何と云ふことには随分能く頭を遣つて研究して居る例へば理想の家庭とは如何とか人生の理想とは如何とか云ふ方面には随分能く研究して居るがさて其理想は現在に於ては如何に實行されるべきか前後の事情に適應しては何れ程迄實行されるべきか將來之を完全に實現せんには如何なる準備を要するか等の實際問答に就きては兎角研究の足らざる感がある。子女教養上にも矢張此弊があつ

と遠き將來の目的を唯其儘に之を現在に實現せんとする様である。

先頃も某教授は案を叩いて慨嘆して云ふには「今の世は理想とか完全とか云ふ方面には誰も熱心に研究もし慾望もするが切て其實行となるといやもを話にならぬ。兎角今時の人の目は遠大に走せて卑近に疎いと云はねばならぬ。此分を押して行つたら希臘の天文學者ではないが溝や古井戸に落ちないのが目付ものだらうよ」と云はれたが味ふ可きことである。京都の谷本博士も近來諸所の教育會などで頻りに演説して世人が徒に擴充に急しくして適應に拙なるを慨嘆して居られる。兒童教養上に於ける一般の趨勢も亦然考へることが出来る。徒に先の事ばかり考へて之を現在に如何に適應せしむ可きかと云ふことには餘り重きを置かぬのは恰もハイガラが日本の家屋へ椅子や食卓で生活しやうとする様なもので到底思はしい結果が得られるものではない。

幼児に課する遊嬉の種類

二十

芙蓉生

「幼児には何んな遊戯をさせたらよいものか」と云ふ質問は幼稚園の先生や熱心な親御からは常に絶間なく出るのであるが、之が根本的解決については嘗てフレイベルが云つたことがある。

「幼児の遊嬉は如何なるものがよいかと云ふて直に返答が出来ない何故かと云ふと一体遊嬉と云ふものは幼児活動の中に見出す可きもので作り出すことの出来ないものであるからだ。余は凡ての遊嬉を幼児に學んだ。而して尙今日も學んで居る。余は自ら學び得たるものを再び彼等に與ふるに過ぎない」と斯く云つて居るが如何にも卓言である、數十年の昔既にフレイベル其人の口から斯様な名言が出て居るのに其我國に始めて幼稚園の設立せられて以來今日に至る迄も「不自然な人工を幼児に加へて其自然活動を妨ぐ」と云ふ批難が動もすれば幼稚園の上に冠せられたのは如何にも不思議千萬なことであると思ふ。併し是より尙一層不思議